

トンガ王国2010年選挙と「民主化」のゆくえ
比嘉 夏子 (京都大学大学院 人間・環境学研究科博士課程)

1. はじめに：民主主義と貴族政治の混交する現在

「我々は貴族政治と共に1000年以上を歩んできたのであり、彼らの指導力があることによって、私たちの歴史、遺産、そして一国民としての自らを誇りに思うことができる。今世紀の終わり、そして来たる1000年に向かって、我々はなお、彼らと共に歩いていこう。たとえそれが新たな未知の行程であるとしても。」(Hau'ofa 1994: 427より筆者訳)

Hau'ofa (1994) による上記の言葉は、90年代前半、トンガ王国 (以下トンガとする) の民主化推進運動が徐々に熱を帯びてきた頃に書かれたものである。当時、より多くの国民が海外へ移住するにつれ経済・教育の水準が上がり、その影響は、コミュニティの強い紐帯を通して確実にトンガ本国に及んでいった。こうして生まれた教育・ビジネスエリート層を中心に民主化運動は発展し、それまで王族や貴族によって多くの権益が掌握されていたことに対する、平民側の不満が噴出し始めた (須藤2008)。

トンガでは政府の汚職事件や不正に対する批判が80年代に活発化し、90年代になるとこの動きは「民主化運動」の形を明確にとりはじめ、一層の高まりをみせた。この状況下において、来たる時代の変化を意識していたにもかかわらず、Hau'ofa (1994) はあえて上記のように、伝統的な貴族政治の将来的な存続を見ていた。これを「王国の歴史と伝統を肯定するトンガ人としての誇り」に根ざした個人的な展望である解釈することもできる。

しかし、この言葉から15年以上が経った昨年末に実施された議員選挙において、民主化推進派議員が圧勝したその矢先、続く首相指名選挙によって選ばれたのは、民主化推進派リーダーではなくまさに貴族出身者であった。「民主化に向かって邁進する」という、周囲が描いた単純なシナリオ通りには歩まないトンガの今日の政治状況は、これからどこへ向かおうしているのだろうか。貴族議員を首相に迎えた現時点では、奇しくもこのHau'ofaの予見が当たっているかのように見える。

21世紀を迎えてからのトンガは、歴史的転換点ともいうべき数々の出来事に見舞われてきた。公務員ストライキの成功、国民に慕われた旧国王の逝去、甚大な経済的被害と衝撃を与えた首都暴動、選挙制度改革と平民代表議員数の増加。太平洋に現存する唯一の王国として長年安定を保ってきたこの国に訪れた近年の急激な変化のなかで、人々は政治に何を求めているのだろうか。「民主主義」という言葉 (トンガ語で *temokalati*) が普及し国民の共通認識になりつつも (どこまで概念的な理解が及んでいるかは別としても)、「伝統的」な貴族政治が継続・維持されている現状は、どのように理解できるのだろうか。

この転換期を読み解く手掛かりとして、本稿ではまず、トンガで実施された2010年議

員選挙およびその後の首相指名選挙について詳細に分析する。そして貴族首相が再誕生したことの背景にある、民主化運動推進派リーダーの目指す「民主化」概念がいかなるものか、検討していく。

2. 2010年の選挙とその後の流れ

(1) 議員総選挙：平民代表議員数の飛躍的増加

2010年11月25日に実施された選挙は、投票率約90%（対選挙人登録数比¹）を記録しただけでなく、平民候補者147人が17議席をめぐって争い²、選挙運動に湧くトンガ国内のみならず、南太平洋における最後の王国がいかにして「民主化」へと進んでいくのか、諸外国もまたその成り行きを注視し、人びとの強い関心を集める中で実施された。全人口の約99%を占める平民層に対して、平民代表議席がこれまでわずか9議席しか与えられてこなかったことへの不満は強く、一連の「民主化推進派」の運動における主張のひとつがこの平民議員数の増加であったことを考えれば、今回の選挙は彼らにとってまさにひとつの到達点であり、歴史的な転換点であったといえる。

しかし今回の選挙制度が実現するまでは決して平坦な道のりではなく、この改革内容こそ、近年のトンガにおいて最も活発に議論されてきた問題であった（Campbell 2008, 須藤2008）。90年代以降の、トンガの民主化運動の流れおよび政治動向について主要なできごとをまとめたのが表1である。そもそも議席数配分に関する憲法改革草案は、政府案・人民政治改革委員案・2005年に設置された国家政治改革委員会（National Committee of Kingdom of Tonga for Political and Constitutional Reform: NCPR）案の3種類から成っていた³。

この議題に関して政府は2006年11月、当年度の議会では採択せず審議を先送りすることを決定した。それに対し一刻も早い採決を望んだ一部の平民代表議員は、民主化推進運動を牽引してきた人物である'Akilisi Pohivaを筆頭に集会およびデモを先導し、首都中心部の建物を次々と襲撃していった。そこでは「反人権・反民主派ないしは親王族・貴族派の所有する建物が軒並み破壊の対象となった（須藤2008: 135）」のである。この事件を引き金にして起きたのが、2006年11月16日の首都暴動「暗黒の木曜日」である。窃盗目的の便乗犯による破壊活動や放火により、一夜にして首都中心部は廃墟化し焼け野原となり、

¹ この選挙ではトンガ国内が17の地域に分割され（トンガタブ島10議席、ヴァヴァエウ島3議席、ハアパイ島2議席、エウア島・ニウアフォオウ島・ニウアトブタブ島各1議席）、選挙民は自らが登録した地域の候補者から1名を選んで投票するシステムで実施された。

² トンガでは満21歳以上の男女に選挙権がある。ただし毎回選挙が実施される度に選挙人登録を行わなければ、実際の投票権は与えられない。今回の選挙において、選挙人登録者数の具体的なデータは公にされておらず、2006年の国勢調査から試算すると、選挙権のある満21歳以上の人口は約50,000人であることから、選挙人登録率は約85%と推定される。

³ 各案の相違点および最終報告の要点については須藤（2008）および東（2010）が詳細に検討をしているが、最終的に採用されたのは政府案と人民代表議員案の中間に位置していたNCPRによる議席案（国王の議員任命権は失われ、人民代表議員枠が17席、貴族代表議員枠が9席）であった。

表 1. 1990年代以降のトンガ民主化運動の流れと主要なできごと

1992年	「民主化推進派」結成
1994年	「民主化推進派」からトンガ初の政党（非公認）the Tonga Democratic Party結党（後2005年にthe People's Partyと改名）
2000年 1月	国王トゥポウ4世の末息子ウルカララ王子を首相に任命
2001年 10月	国王が国家財政の一部をアメリカの実業家に投資・損失したという財政スキャンダルの表出
2003年 3月	憲法の部分改正が行われ、国王のメディアに対する権力行使が可能になる
2004年 5月	国営ロイヤルトンガ航空が経営難により倒産
2005年 3月	選出された国会議員から初入閣（9名の平民議員のうち2名が入閣。それまで閣僚は王族による指名であった。）
	7月～8月 公務員による長期ストライキと首都での暴徒事件
	9月 民主化改革を求めて数千人規模のデモ行進
2006年 3月	ウルカララ王子が首相解任、フェレティ・セベレが初の平民首相に
	9月 国王トゥポウIV世が闘病の末に逝去し、長男であるトゥポウトア皇太子が王位を継承
	11月 首都で暴動が発生し緊急事態宣言。中心部の8割が焼失、死者8名と逮捕者約800名を出す
2007年 2月	緊急事態宣言の延長。商業中心地区の再建が外国援助によって計画される
	7月 トンガ王国が151カ国目の加盟国としてWTOに承認される
2008年 4月	現行憲法下で選挙が実施され、平民議席9議席のうち7議席を民主化推進派が獲得
	7月 憲法・選挙（制度改革）委員会設置の法律が議会で成立
	国王トゥポウV世が民主化の要求に応え、国王としての権限の多くを譲渡する予定であると宣言
	8月 国王トゥポウV世の戴冠式
2009年 8月	国有船舶プリンセスアシカ号がハアパイ諸島沖で沈没、74名が死亡
2010年 11月	平民代表議員17名（貴族代表議員9名）を選出する、選挙制度改革後初の選挙を実施、民主化推進派政党であるFIDPが圧勝
	12月 新議員による首相指名選挙により、貴族代表議員のトゥイヴァカノが首相に選出され、FIDP代表のポヒヴァは敗れる。
2011年 1月	首相が閣僚を指名（全11名のうち無所属5名、FIDP 2名、貴族2名、議員以外から2名）するが、保健大臣に任命されたFIDP代表のポヒヴァは10日足らずで辞任

これまでFriendly Islandsの名で知られてきた平和な王国に、この暴動は深い爪あとを残した（死者8名、逮捕者800名以上、破壊された建物や商店など全体的な経済的被害額は推定数億ドル）。

この首都暴動を扇動した責任を問われながらも、その後も変わらず村落部の強い支持を集めながら民主化推進を牽引してきたPohiva⁴は、2010年選挙に向けて新たにthe Friendly Islands Democratic Party（以下FIDPとする）を結党し、党出身の候補者を一人でも多く当選させるべく選挙活動に奔走した。その結果、平民代表の全17議席中12議席（得票率28.49%）がFIDPの候補者から当選し、残る5議席を無所属の候補者が占めた（表2参照）。FIDPが特に首都ヌクアロファを有するトンガタブ島で圧倒的な支持率を獲得したことは、トンガ国民が民主化に向かっていることの反映として、国内外に向けて報道された（Matangi Tonga Online 2010）。

その一方で、貴族代表9議席は33家系からなる貴族自身の手によって選出されたが、そもそも貴族代表議員への投票者総数はわずかに54名であった。また候補者数および議席数の増加に沸いた平民代表議員選挙とは異なり、貴族代表議員選挙は旧来どおりの議席数での選挙だったため（表3参照）、こちらは前者ほどの注目を集めることもなく、幕を閉じた。

（2）首相指名選挙：民主化への第2ラウンド

このように平民代表議員数が大幅に増加しかつてない注目を集めた今回の選挙で、FIDPの候補者が圧勝したことは、民主化に向けてより一層の前進を望む平民側の民意の反映として受けとめられた。そしてその後続く首相指名選挙にさらなる注目が集まった。というのも今回のもうひとつの焦点が首相の指名方法の改正であり、これまで国王が首相及び全ての閣僚を指名していたのに対し、今回の選挙からは、選出された新議員によって首相指名選挙が実施され、それによって選ばれた新首相が副首相および大臣を指名することが決定していた。つまり政治における国王の権力はここにおいてもかなり縮小され、逆に議員の持つ権限が大幅に拡大した。

議員選挙の結果を受け、新議員は大きく分けて、FIDP平民代表議員（12名）／無所属平民代表議員（5名）／貴族議員（9名）のグループに三分され、続く首相指名選挙へ向けてFIDP側と貴族側が無所属議員の取り込みをめぐる争うことが予想された。この段階、つまり議員選出の第1ラウンドよりも首相選出の第2ラウンドにおいて、より一層の混戦が予想されると国内メディアは報じた（Matangi Tonga Online 2010）。その後実際に新選出議員から推薦された首相候補者は、FIDPを率いる平民代表議員の'Akilisi Pohivaと貴族代表議員のLoad Tu'ivakanoの2名であった。議員による投票数の過半数

⁴ 暴動後に実施された2008年総選挙においても、Pohivaは過去最高の得票数によりトップ当選を果たしている（須藤2008）。

表 2. 2010年選出の人民代表議員 (17名) の構成

氏名	選挙区	所属	備考
1. Samiuela 'Akilisi Pohiva	トンガタブ 1	FIDP	(保健大臣→辞任)
2. Semisi Kioa Lafo Sika	トンガタブ 2	FIDP	
3. Dr. Sitiveni Halapua	トンガタブ 3	FIDP	
4. 'Isileli Pulu	トンガタブ 4	FIDP	観光大臣
5. 'Aisake Valu Eke	トンガタブ 5	無所属	
6. Siosifa Tu'itupou Tu'utafaiva	トンガタブ 6	FIDP	
7. Sione Sanster Saulala	トンガタブ 7	FIDP	
8. P. Sione Havea Taione	トンガタブ 8	FIDP	
9. Kaveinga Fa'anunu	トンガタブ 9	FIDP	
10. Semisi Palu 'Ifoni Tapueluelu	トンガタブ 10	FIDP	
11. Sunia Fili	エウア 11	無所属	財務大臣
12. Mo'ale Finau	ハアパイ 12	FIDP	
13. 'Uliti Uata	ハアパイ 13	FIDP	保健大臣
14. Lisiate 'Aloveita 'Akolo	ヴァヴァウ 14	無所属	労働通商産業大臣
15. Samiu Kuita Vaipulu	ヴァヴァウ 15	無所属	副首相
16. Dr. Viliami Uasike Latu	ヴァヴァウ 16	無所属	国防大臣
17. Sosefo Fe'aomoeata Vakata	ニウア 17	FIDP	雇用・青年スポーツ大臣

表 3. 2010年選出の貴族代表議員 (9名) の構成

氏名	選挙区	備考
1. Lord Tu'ivakano	トンガタブ	首相
2. Lord Ma'afu Tukui'aulahi	トンガタブ	土地資源環境大臣
3. Lord Vaea	トンガタブ	農林水産大臣
4. Lord Lasike	エウア	
5. Lord Fakafanua	ハアパイ	
6. Lord Tu'iha'ateiho	ハアパイ	
7. Lord Tu'i'afitu	ヴァヴァウ	
8. Lord Tu'ilakepa	ヴァヴァウ	
9. Lord Fusitu'a	ニウア	

(14票/27票) を獲得した候補者が次期首相として任命されるため、FIDP側と貴族側の双方にとって、無所属議員の取り込みは当選のために必至でとなった。またFIDPは貴族代表議員に対しても水面下の交渉を行い、閣僚入りを約束する形でPohiva支持を促したという。

結果的に2010年12月21日に行われた首相指名選挙では、貴族代表議員Tu'ivakanoが過半数の14票を得票し首相に指名され、一方の平民代表議員Pohivaは12票の得票により、僅差で敗れた。この選挙では無記名投票であったため票の構成を特定することが不可能だが、FIDP議員のなかにも首相としてPohivaを支持しない者がいるという噂が事前に流れていたように、単に無所属議員の票が移動しただけではなく、FIDP内部での亀裂もあったのではないかと、という推測も飛び交った。

翌日Tu'ivakanoは国王から正式に首相に任命され、トンガ初の平民出身首相として5年間の任期を務め終えたFeleti Seveleと交代する形で新首相が誕生した。その後クリスマス休暇を挟み、交渉と調整の期間を経て、2011年1月4日に新首相Tu'ivakanoは11名の閣僚を発表した。新閣僚の人選および役職については表2と表3の備考を参照されたいが、無所属平民代表議員5名、FIDP平民代表議員2名、貴族代表議員2名、外部から任命された2名によって全11名は構成された。新制度では首相が指名する閣僚11名のうち、4名までは議員以外の人物から指名できている。しかしこの組閣内容にFIDP側、特に代表のPohivaは強い不満の意を表し、自身は保健大臣に指名されその職を一旦受諾したにもかかわらず、新内閣の発足から10日立たずして辞任することを発表した。その理由として彼は以下の2点を挙げた。

1. 自分の政党 (FIDP) の内部に閣僚としてふさわしい人物がいるにも関わらず、外部の人材から2名が指名されたこと。
2. 政府に反対する票は投じない、という内閣の同意書へサインすること (この同意書へのサインはすべての新閣僚に求められた)。

これに対して新首相Tu'ivakanoは、外部の人材から閣僚を指名することは既に認められた新首相の権利であり、また今回選ばれた2人はその経歴、能力において当該大臣に相応しいことは明らかである、と反論した。そしてPohivaの辞表は受理され、空席となった保健大臣にはその後の再調整によってFIDP平民代表議員の1人が指名された。

3. 民主化推進派リーダーの敗北

新議員が選出された直後には、国王や一部の貴族さえも「次期首相は平民から選ばれるのが好ましい」という旨の発言をしたと報道された⁵。FIDPの勝利ともいえる選挙結果を受けて、平民の意見が政治により反映されやすいシステム作りへの合意を表明していたの

⁵ Radio New Zealand International 'Veteran pro-democracy campaigner has major success in historic Tonga elections' [<http://www.rnzi.com/pages/news.php?op=read&id=57263>]

である。それにもかかわらず結果的には、これまで30年近く「民主化運動」を牽引し国民の支持を得てきたPohivaではなく、貴族代表議員が新首相として選ばれた。この理由は何だったのだろうか。

当選した無所属議員のグループを代表する形で発言したSamiu Vaipuluは首相指名選挙直前の記者会見で、FIDP主導の統一内閣を結成しようとするPohiva側の動向を支持しない理由と、彼らとの間にある根本的な意見の相違として、以下の3点を挙げた。

1. トンガの法制度において政党制は未だ十分には理解されていない。
2. FIDPが作成した「覚書⁶」(には賛同できない)。貴族議員と無所属議員はそれぞれの憲法(改正)についての優先事項がある。
3. FIDPのリーダー(すなわちPohiva)が持つ国家を牽引する能力について、信用と確信に欠く⁷。

首相選挙の無記名投票前には、候補者2名と各々の推薦者が、議員に対して支持を呼びかける最後の演説を行った。このとき平民代表議員のPohivaは、これまで自らが30年近くかけて取り組んできた民主化運動がようやく結実しつつあることを強調し、更なる民主的発展に取り組んでいくことを誓った。一方で貴族代表議員のTu'ivakanoを推薦した無所属平民代表議員の一人Sunia Filiは、Pohivaが首相に選ばれた場合には議会が分裂すると警告し、今必要なのは(FIDP・無所属・貴族から構成される)議会全体をまとめ、牽引していくことのできる強い指導力である、と主張した(Matangi Tonga 2010)。

このように、2010年議員選挙および首相指名選挙のプロセスの中でより一層明るみになったのは、「平民代表議員」VS「貴族代表議員」というトンガの社会的ヒエラルキーに根ざした対立の構図ではなく、「FIDP平民代表議員」VS「無所属平民代表議員および貴族代表議員」という別の対立軸の存在であった。そして僅差とはいえ後者を支持する人びとの数が勝ったことから、「民主化」の名の下に「貴族政治を廃止」して自らの政党を中心とした政党政治を展開しようと画策するPohivaおよびFIDPに対する根強い反発がうかがえる。

自らが敗北した首相指名選挙の後、Pohivaは記者団に対し、「オーストラリアおよびニュージーランド政府は貴族が首相として選出されたことに対し『喜んでいない。』』」と言い「これまでの政治体制下ではオーストラリアおよびニュージーランドから与えられた援助に関しての信頼性と透明性がなく、これでは真の変化がまったく見られない。」と語った。しかしこの発言は事実無根であるとして、駐トンガニュージーランド高等弁務官に

⁶ マニフェストではなく覚書(メモランダム)の形で発表されたFIDPの方針には、FIDPを中心とする政党政治を推進することや、貴族代表議員も平民が選挙することなどが含まれていた。

[<http://www.taimionline.com/articles/638>]

⁷ http://www.matangitonga.to/article/20101215_tonga_political_party.shtml

よって即座に否定された⁸。

上述の事件が端的に示すように、これまで「民主化運動」のなかで繰り返されてきたPohivaの過激な発言では、貴族代表議員（ひいては貴族・王族全体）を敵とみなす姿勢が一貫して表明されている。すなわち民主化推進派リーダーである彼こそがまさに、欧米的な価値観に支えられた「民主化」をトンガに伝統的な「貴族政治」に対立するものとして表象し、単純化された構図として国民に普及させようとしていることが明らかなのである。すなわちPohivaの抱く「民主主義観」とは、「民主主義＝欧米的＝透明性と信頼性＝目標とされるべき」に対する「貴族政治＝伝統的＝透明性と信頼性の欠如＝廃止に向かうべき」という二項に根ざした価値観である。

これまでラジオ放送の実施や新聞の発刊などを通して積極的に国内メディアに関わり、それを通して民主化のメッセージを広めてきたPohivaと同様、トンガを代表するもう一人のメディアパーソンであるKalafi Moala⁹は、Pohivaの政治思想およびの彼の語る「民主化」概念それ自体を批判し、以下のように述べている。「首相の座がPohiva氏ではなくTu'ivakano氏に決定したことに私たちは安堵している。もしも彼の腰巾着たちと共にPohivaが議会を支配することになっていたなら、私たちは何一つ乗り越えていけなかっただろう。トンガは経験不足でおそらく無能な指導者による新時代に突入しかねなかったというだけでなく、「人民」自身によって主導された200年の歴史上初めての完全な独裁制を促すような危険な政治的アジェンダによる新時代に突入しかねなかったのである¹⁰。」ここではまた特にPohivaや彼の周囲にいる民主化推進派議員が念頭に置く「民主化」が、欧米的価値観の模倣すなわち安易な「欧米化」を目指していることを批判し、「Pohivaと彼をとりまく民主化推進派の人びとは、外部の価値観、システム、力によってトンガが支配されることを望んでいる。」と述べている。このように民主化推進派リーダーPohivaの掲げる「民主化」のイメージに対しては周囲からさまざまな反論が表出ししており、この結果のひとつに、今回の「貴族首相」の再誕生があると考えられる。

5. おわりに：トンガ独自の「民主化」へ

1875年の憲法制定以降トンガの政治は、実質上、国王をはじめとする王族、また彼らを取り巻く貴族によって運営され、政治的な権益はこの内部でほぼ独占されてきた。つまり人口の大半を占める平民層の声が政治の場に反映されることは制度上実現不可能であっ

⁸ 「そのような発言の事実はなく、トンガの首相選出に関してニュージーランド政府は一切干渉する立場になり。」と発言した (Taimi Media Network 2011)。[<http://www.taimionline.com/articles/1227>]

⁹ Taimi Media Networkを運営し、新聞、ラジオ放送、テレビ番組、インターネットニュースの配信など多岐にわたる情報発信を行っている。

¹⁰ 'TONGA IN GOOD HANDS ON ROUGH ROAD TO DEMOCRACY' Pacific Islands Development Program East-West Center [<http://archives.pireport.org/archive/2011/January/01-20-cm.htm>]

た。しかし政府による汚職事件や不正の糾弾、公務員ストライキの成功や首都暴動の発生など、近年に生じためまぐるしい社会変化と教育・ビジネスエリートである平民の先導による「民主化運動」の活発化によって、政治改革が叫ばれるようになった。こうして内側から沸き起こった圧力を受けて、現国王トゥポウV世は自らの権力の範囲を大幅に縮小することを宣言し、平民がより政治に直接参加し、意思決定のプロセスに関与することができるよう、協力する姿勢を見せた。

人びとの長い議論の末に決定した憲法改正法案を受け開催された2010年の議員選挙では、平民代表議席がこれまでの9議席から17議席にまで増加し、また首相を国王が指名するのではなく、新議員によって首相指名選挙が実施された点において、かつてない「民主的な」プロセスによって政治体制が整えられた。しかしPohivaが代表を務めるFIDPが議員選挙では大勝したにもかかわらず、新首相には貴族代表議員であるTu'ivakanoが選ばれたことで、必ずしもPohivaの唱える「民主化」が他の議員に支持されていないことが明るみになった。

「民主主義／貴族政治」を相反する概念として描くPohivaのロジックはまた、「欧米／トンガ」「グローバル／ローカル」「近代／伝統」といった対立概念にも支えられており、彼が伝わりやすいイメージとしての「民主化」概念をメディアで戦略的に発信してきたことによって、生活の向上を求める多くの国民の支持を得てきたことは明らかである。限られた情報の中を生きる、特に村落部のトンガの人びとにとって、耳慣れてきたとはいえ漠然とした概念でない「民主化」が今後どのように理解されていくのか、更なる検討が必要である。

東(2008)が指摘するように、本来「民主主義」と「君主制」は矛盾する概念ではなく、トンガの文脈でいえば「民主的な政治制度」と「王族・貴族主導の政治」は両立可能な概念である。またPohivaや彼の思想に同調する一部の議員を除けば、トンガ国民の多くは、これまでの長い歴史のなかで培ってきた王を頂点とする社会構造や、貴族政治それ自体を否定してはおらず、トンガの歴史・文化的な背景を汲んだうえで、具体的な諸問題、主に経済発展の実現を目指しつつ、より平民の政治参加が可能となるような改革路線を目指しているといつてよい。須藤(2008)はトンガでの過去20年以上にわたって展開された民主化運動について検討し、その出来事が与えた影響の大きさおよび変革の流れを認めながらも、「130年間続いた『専制的』立憲君主制のもとで、王と王族に対する尊敬と恭順の意識と態度は、依然として国民のあいだに深く根づいている。(ibid: 138)」と指摘する。

本論の冒頭で述べた「民主主義」と「貴族政治」の混交する現在を、制度的な移行期にあるトンガの政治が今後どのように歩んでいくのか。今回の議員選挙および首相指名選挙の結果を受けて、欧米をはじめとする外部の概念のレプリカにはとどまらない、トンガ独自の「民主化」へと向かう流れが、今後も注目される。

【謝辞】

本論文を執筆するにあたり、国立民族学博物館共同研究会「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」での議論および発表に対するコメントを参考にさせていただきました。記して感謝いたします。

【参考文献】

Campbell, I.C.

2008 Across the threshold: regime change and uncertainty in Tonga 2005-2007. *Journal of Pacific History* 43(1): 95-109.

Hau'ofa, Epeli

1994 Thy Kingdom Come: The Democratization of Aristocratic Tonga. *The Contemporary Pacific* 6(2): 414-27.

Lawson, Stephanie

1996 *Tradition versus Democracy in the South Pacific: Fiji, Tonga, and Western Samoa*. Cambridge. Cambridge University Press.

1997 *Cultural Traditions and Identity Politics: Some Implications for Democratic Governance in Asia and the Pacific*. State, Society and Governance in Melanesia Discussion Papers, Nr 97/4. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.

[<http://dspace-prod1.anu.edu.au/bitstream/1885/41807/2/ssgmlawson.pdf>]

Matangi Tonga Online

http://www.matangitonga.to/article/global_index.shtml

Radio New Zealand International

<http://www.rnzi.com/index.php>

Taimi Media Network

<http://www.taimionline.com/>

須藤 健一

2008 『オセアニアの人類学—海外移住・民主化・伝統政治』風響社

東 裕

2010 「トンガ王国の民主化と憲法改正『憲法・選挙委員会：最終報告』の要点」社団法人太平洋諸島地域研究所 [<http://www.jaipas.or.jp/>]